ヴィジュアリティ研究会

現代メキシコにおける武装闘争

崎山政毅

はじめに

この小論ではメキシコにおける武装闘争，就中 1960 ～ 80 年代初頭のそれを対象とし，それらがいかなるものであったのかを考察する。

メキシコを対象とするのは，南東部チアパス州に反グローバル化の象徴的な存在となった先住民族ゲリラ組織「サパティスタ民族解放軍（Ejército Zapatista de Liberación Nacional; EZLN）」が存在するからである。「権力を奪取しない革命」といった〈抵抗〉の強調と，「もうひとつの世界は可能だ」というような〈オルタナティヴ〉のスローガンが見えにくくさせているが，「サパティスタ民族解放軍」は今なお武装闘争組織であり，武器を手放してはいないのである。彼らの闘争がどのような意味を持っているのかを考えるにあたっては，その前提たるメキシコにおける武装闘争・ゲリラ戦争の経過をふまえておかねばならない。

また，視覚文化とりわけテレビ映像・報道写真をつうじた政府側からの反乱鎮圧作戦と闘争組織側からの宣伝・煽動工作とのせめぎあいが，学生運動に対する血の弾圧――「トラテロルコの夜」として知られる 68 年 10 月 2 日の軍による数百人もの学生・青年の虐殺――ののちに，重要なファクターとして浮かび上がってきている。

その事実はラテンアメリカにおける視覚文化の政治性を論じるにさいして，避けては通れない課題であろう。

メキシコにおける近代的武装闘争組織の登場とその背景

メキシコの武装闘争は二重の「革命的な光彩」にいろどられていた。

その第一は，いうまでもなくキューバ革命の影響である。周知のように，カストロやゲバラたちは少人数の農村ゲリラ闘争からはじめて，敵＝バチスタ政権との圧倒的な差を着々と縮め，都市部の反独裁ブロックとの連携によって権力奪取をなしとげたのだった。この過程は，その実態のダイナミズムを冷静に分析せず，また戦術論としてのみならず革命兵士に必須の倫理学としても読みうる『ゲリラ戦争』（1961）を聖典のように扱うならば，否応なくロマン主義の趣を備えることとなる。

そしてその第二は，1910 年代のメキシコ革命において，エミリアーノ・サパタやパンチョ・ビリャらの率いる農民兵たちを軸とした武装と戦闘の経験である[1)]。彼らは，1914 年秋以降支配的ヘゲモニーをにぎったベヌスティアーノ・カランサ政権（資本家・地主・小ブルジョア階

級の支持を基盤とする）に対して，1917年憲法制定をつうじて情勢が一定沈静化するまで，南部（サパタ派）と北部（ビリャ派）で連携した農民ゲリラ戦争によって揺さぶりをかけたのである。つまり義賊的な面が強調される人民武装の「輝かしき伝統」というわけである。

こうした背景があるため，メキシコの武装闘争の根底には，キューバ革命がもたらした「高揚した雰囲気に流されて」突然登場するような一揆主義的傾向ではなく，キューバ革命にも連なる歴史的地下水脈が流れ込んでいると考えても過言ではない。とはいえこの小論の冒頭部に述べたように，少人数での農村ゲリラ闘争を初期条件として革命権力樹立にまでいたったキューバの政治的激動は，アメリカ合衆国・ケネディ政権とソ連・フルシチョフ政権との間の瀬戸際での緊張関係（キューバ危機）をもたらすほどの衝迫力をもっていた。それゆえ，キューバ革命からさほど時間を経ない1960年代のメキシコにおける武装闘争をめぐる諸条件もまた，その衝迫力からは自由ではありえなかったのである。

こうしたメキシコの被規定性をふまえると，最初に分析するべきなのは，メキシコにおける左派武装勢力の登場とその歴史的文脈，そしてそれらの諸勢力を圧殺しようとする反乱鎮圧作戦の推移ということになろう。

反乱鎮圧作戦の概観

現在もなおその「伝統」は脈々と継承されているが，メキシコにおける反乱鎮圧にはつねに「重大犯罪抑止」という正当化の言説がつきまとっている。1994年に南東部チアパス州で武装蜂起した直後に，開かれた対話路線へと転じた「サパティスタ民族解放軍」に対して「和平と調和のための法」を制定したことを除けば，あらゆるゲリラ集団は単なる「犯罪集団」と考えられてきた。

たとえば太平洋岸ゲレロ州の「貧民党（Partido de los Pobres）」は「牛泥棒集団」と呼ばれた[2)]。サパティスタのマルコス副司令をはじめとする「サパティスタ民族解放軍」のメンバーや，「貧民党」が他の数集団と合体して太平洋岸ゲレロ州･オアハカ州で展開する「革命人民軍（Ejército Popular Revolucionario）」などは「法の蹂躙者たち」「テロリスト」呼ばわりである。つまりはメキシコには政治犯などおらず，あくまで悪質な犯罪集団が跋扈している，というのが政府の公式見解なのだ[3)]。

だがしかし，メキシコ国家権力が武装勢力に対しておこなう実際の戦闘行動は，「法の防衛」をはるかに超え出るものだということは言うを俟たない。1965年からこのかたメキシコの国家権力は，農村ゲリラ・都市ゲリラ組織化の第一波（いわゆる《68年》の結果である）を解体することを可能ならしめる，国際的な反乱鎮圧ドクトリンを展開してきた[4)]。

ではどのような反乱鎮圧策がとられたのか。以下，箇条書きで挙げていこう。

① 戦略の根幹は，反乱組織の活動抑止と抹殺におかれている。

② 武装闘争に対抗してのイデオロギー闘争は不要とされ，そのためにゲリラ活動はメキシコのマスメディアで一切報道されず，地下出版の機関紙・機関誌はけっして大衆に届かないように監視される。

③ 武装闘争組織構成員は「危険犯罪分子」として分類され，それによって反乱鎮圧作戦の

正当化がはかられるのみならず，政府の攻撃がつねに陥る「行き過ぎ」に反対する人権擁護団体を封殺する効果ももたらす。

④ 農村部でのゲリラ活動を抑止・殲滅するために，ジャングル地帯や山岳部での非正規戦を十全に戦えるように武装と部隊の性格の「近代化」をおこたらない。この戦略には，特殊部隊の運用や心理作戦の行使が含まれる。

⑤ 都市ゲリラの抑止と殲滅の戦略では，警察機構および民間警備会社の機能をすみずみまで活用し，有効な拷問方法を開発する実験，不当逮捕・拘留，超法規的処刑（つまり目障りな活動家のリンチ殺人），強制失踪（活動家を殺害し，どこかに埋めて隠す）などの任務をまかせた。

⑥ 都市での反乱鎮圧のために動員した諸集団を準軍事組織へと編成し，無処罰特権を与えた。その結果，「鷹兵団 Los Halcones」「オリンピア大隊 Batallón Olimpia」「白色旅団 Brigada Blanca」といった，「死の部隊」とも別称される政府の尖兵としての全国レヴェルの組織が登場することとなった。

⑦ 武装闘争組織に世間から隔絶させ組織行動がとれないほどにバラバラな状況に追い込み内紛が絶えないようにさせるため，ゲリラ組織の各レヴェルに対する個別撃破をはかり，政治 - 軍事指導部の他の構成員からの切り離しと直接破壊を狙った[5)]。

ここに列挙した七点の反乱鎮圧政策は，つねに直接戦闘の形式をとっていた。対外的な「陽気なメキシコ」イメージや，国内でもマスメディアを通じて醸し出される「日常」のイメージとは対極にある。じじつ，十五年にもおよぶ全国各地での掃討作戦をメキシコの国家権力は秘密裏に粛々と遂行し続けたのである。その結果，シンパであろうと戦闘員であろうと，あるいは誤解の結果であろうと，何らかのかたちで武装闘争に関連していると**された**人々の殺害や「失踪」は，少なくとも何百人にものぼった。

その結果，武装闘争組織ばかりでなく学生・労働者あるいは農民の戦闘的な諸組織にいたるまで，社会的な支援や後援・救援をしてくれる基盤を奪われたあげく，治安弾圧に対抗する唯一の術は，地下活動に徹すること以外になかった。そうした後退局面は，組織化の方法論的な選択肢をせばめ，スパイの浸透をさらにおしすすめる結果を生み出した。

1970 年代後半に入ると，政府による追及に対抗しうる組織はほぼ皆無となり，武装闘争を選んだ青年たちの大多数は，殺害されるか投獄されるかという無惨な結末を強いられた。

ところが，カーター政権による人権外交の圧力と政治改革（＝部分的民主化）への大衆的支持をうけたホセ・ロペス・ポルティージョ政権（1976-1982）が，ゲリラ組織の生き残り活動家たちに対して，武装解除と引き換えの社会復帰を特赦令として認め，もし望むなら政治論争をしてもよいとの布告を出したのである。

この「大盤振る舞い」の背後には，武装闘争・街頭実力行動を金輪際封殺し，選挙を唯一の政治回路とする目論見が存在した（合法化を望まない左翼党派は，その時点で抹殺対象とされるわけである）。この特赦に応じたのは二十人ばかりの元ゲリラ兵士だったが，その全員が釈放後一年と経たないうちに暗殺の憂き目をみることとなった。権力が提供したのはアメとムチではなかったのである。

1965年から1982年までのメキシコにおける，4代にわたる政権下の反乱鎮圧の概要をここまで簡単に追ってきたが，以下もう少し詳しくそれぞれの運動体のありようを紹介し，分析をおこなっていきたい[6)]。

ゲリラ闘争の「第一波」

メキシコにおける武装闘争，この場合にはゲリラ闘争であるが，その「第一波」は1960年代半ばから60年代末にかけての時期と考えることができる。何十もの反乱集団・武装闘争組織がこの時期に登場してきた。しかしそうした闘争の高揚に対する国家権力からの応答はまさしく残虐という文字を刻み込んだ記念碑的なものであった。

青年1,700人以上が32の武装闘争組織に属したことが判明しているが，その大多数が暗殺されるか，治安部隊との戦闘で命を失っている。各代の大統領は「民主的」にその権力の座に着くや，真っ先に武装闘争組織の抹殺を指示し，蕾のうちに摘み取れと厳命したことがブルジョア新聞の報道からも知られている（もちろんその命令は「犯罪組織撲滅」として下された）。それだけ武装闘争は，たとえその諸組織の実態が脆弱なものであっても，権力にとって恐怖の的であったのだ。

たとえば60年代半ば以降のゲレロ州の状況を見てみよう。ここには「貧民党」と「ゲレロ市民協会 Asociación Cívica Guerrerense」の二つの戦闘的組織があったが，息も継がせぬ警察と軍特殊部隊との連携による弾圧によって，両者とも数年でいったん壊滅状態に追いやられている。戦闘場所はありとあらゆるところに及んだ。都市の街路も農村部の畑も，学校も工場もこの「汚い戦争」の戦場と化した。ちなみに「鷹兵団」「白色旅団」が形成されたのも，この一連の戦闘においてであり，それらの準軍事組織には現職の警察官や軍人らが参加していたことが明らかになっている[7)]。

どれほどの犠牲があったのかは未だ定かではない。スターリン主義のメキシコ共産党から分派した「過程派 Los Procesos」などの諸組織が連合した「9月23日共産主義者同盟 Liga Comunista 23 de Septiembre」の元メンバーは，上記二組織にかかわる犠牲者数を3,000人以上とみつもっている。それには戦闘員のみならず，シンパ，家族・友人・知人にも及んだ[8)]。

ゲレロの武装闘争組織のメンバーの大多数が経た道は，まず学生や市民や農民として大衆運動（デモ）へ参加することにはじまり，流血の弾圧を受け，それへの対抗のなかからよりラディカルな闘いに身を投じるというものである。こうした道筋は当然のこと，権力によって特定される危険にみちている。そしていったん特定されたなら，当人のみならず家族・恋人・友人・知人すべてが潜在的な国家の敵として「認定」されるのだ。

「汚い戦争」として現れた反乱鎮圧・弾圧政策は，通りすがりの人も被害者に巻き込むような傍若無人な無秩序さと無際限さを旨としていた。闘う組織の原則を暴力で踏みにじることそのものが闘う組織を人民から孤立させる「環境」を形成するわけである。さらに組織メンバーの人間関係すべてを破壊することに何のためらいもないような残虐さが，闘争組織の「弱点」を増幅していくこととなる。というのは，武装に武装で対抗することが，直接闘争に関係ない無辜の死者を増大させるとしたら，その責任が第一に権力とその使嗾する暴力団（準軍事組織）

にあっても，鎮圧作戦における孤立策は成功するからである。

しかし，この「武装闘争の第一波」に対する作戦は，その戦場にかぎっては「成功」したかもしれないが，結果としては力でごり押しする以外に能のない冷酷な政府の姿勢を満天下に示し，権力にとってははからずも，さらに多くの武装組織を生み出す土壌を耕すこととなったのである。

北部チワワ州マデラ市での武装蜂起

「第一波」のもっともめざましい闘争は，1965 年 9 月 23 日深夜，北部チワワ州のマデラ市で起こった。高等師範大学学生・小学校教師・労農組合指導者・大学教授・医師・農民・農業労働者らが結集して創設した，「人民ゲリラ兵士団 Grupo Popular Gerrillero」がその主役である。彼らは同日，マデラ市の陸軍兵営を襲撃し（図 1），武器を奪取したうえでの大衆武装蜂起を計画していたのである[9]。

図 1　1965 年 9 月 23 日の学生・労働者ゲリラ部隊によるマデラ兵営襲撃の写真

高踏的に分析すれば，客観的条件が熟していたとは到底いえない。たしかにマデラ市が抱えるタマワルパ山地の共同体に暮らす先住民貧農たちは疲弊しており，怒りをぎりぎりのところまで溜めていた。それゆえそれらの貧農たちはすすんで「人民ゲリラ兵士団」に参加したのだった。もし襲撃が成功裡に終われば，一定の反乱状況をつくりだすことは可能であったろう。だが，それ以上の持続的展開のプランを「人民ゲリラ兵団」は戦略として持っていなかったのである。

しかも，この組織には結成当初から軍情報部のスパイが潜入していた。そのため，すでに兵営側では迎撃の準備ができており，「人民ゲリラ兵士団」は多数の中心的活動家の命を代償として支払わなければならなかった。

とはいえ，この組織の「失敗」が示した政治的な敵の設定はのちのメキシコの左派政治に画期的な影響を与えることとなった。なぜなら，「人民ゲリラ兵士団」が敵としてリストアップしたのは，横暴な地域ボスのみならず，その後ろ盾である中央政府，さらには農民たちの共有地をつぶす「第一の敵」としての米国企業や米国人地主（メキシコ憲法に照らせば不法な土地所有者である）だったからだ。

その一方で，彼らには決定的ともいえる弱点が存在した。メンバー，とくに中心的メンバーが地域であまりにもよく知られた人々だったということである。じっさいには，その知名度が災いして「地下活動」などは端から不可能だったのである。

襲撃を受けた側が全国紙に語った言葉がある。マデラ市を含む軍管区の司令官であるサモラ将軍は「それらの紳士諸君は何か間違ったのでしょうな。銃弾が放たれていましたから，死傷者が出ているはずです」。この軍人と行動をともにした当時のチワワ州知事デュランはもっと辛

辣に評している。「何も，まったく何一つ起こっておらんよ。ばかげた言い分を真に受けた阿呆どもの喧嘩騒ぎに過ぎん」[10)]。

圧倒的な敗北，みじめな失敗。闘って斃れた人々の変革への熱意は疑いを容れないものであっても，この組織行動にそうした評価以外の総括はありえないだろう。だがそれがともかくも，メキシコにおいて武装闘争が記した第一歩だった。そして闘う者たちにとって，「9月23日」という日は特別な意味を持つようになったのである。

農村部武装闘争の最初の声明がもたらしたもの

「人民ゲリラ兵士団」の蜂起よりも一年ほど時間を遡るが，左派系新聞『行動 *Acción*』紙に，次のような声明が掲載された。

> 当局が人民の抱える問題の責任を一切取らないこと，そして政府軍に蹂躙された人々が地域ボス連中に踏みにじられている者たちに加わっていることを見て，我々は我々自身の手によって正義を貫くため，そして農民の生活を困苦に陥れている大地主を懲らしめるために，武器をとることを宣言するものである。
> 我々はすぐに闘争態勢に移り，最後の最後まで戦い抜く。何物も何人たりとも我々から武器を奪い取ることはできない。人民にとって重大な問題が解決される日，土地が分配され抑圧に対して正義がなされる日，その日に我々は武器を置くだろう。そうでなければ我々は斃れるまで闘っていく[11)]。

組織名は明らかにされていない。そのため地域もその具体的条件も分からないが，ここに述べられていることはメキシコの農村部が共通して抱えている深刻な問題を平易な言葉で表現したものにほかならない。

この声明（コミュニケ）が，全国紙と比較すれば圧倒的に少ない読者しかいない左派系新聞の記事であるにせよ，公けにされた初の武装闘争のそれであった。非常に鮮明に武装闘争の開始をこの短い声明は告げている。敵は大地主および彼らと結託した軍部だ，と農村の現実に即した規定がなされている。

そしてこの声明はまるで飛び散る野火のようにメキシコ南北の農村地帯に武装闘争の火種をばらまいていった。とくに，北部のチワワ，ソノラ，シナロア，南部のゲレロ，オアハカ，チアパス農村地帯で武装闘争の炎が燃え上がったのである。その結果として，農村部は政府軍部隊とゲリラ部隊の間での流血競争の呈を示す「劇場」となった。互いに同じような戦術を駆使しあったあげくに，農村は農民の生活する場ではなく，血に興奮して我を忘れた輩同士のいたちごっこのごとき暴力の巷と化した。ちなみに60年代半ばからの数年で,「大量虐殺」「追跡」「コミュニケ」「拷問」「謀殺」といった言葉が，マスメディアを介して世間一般に通じる俗語となったという事実が，その間に起こった事態の凄まじさを如実に表していよう。

しかし農村問題はもちろん武装闘争で簡単に片が付くというものではない。先の声明に「土地分配」が謳われていたが，土地を分配して解決というわけにもいかない。公正な土地分配の

あとに，長い期間をつうじて自立した小農を保護・育成していく社会的・経済的諸条件が必要なのであり，そのために政治的･軍事的な安定と地主による不法な暴力の抑制が重要なのである。ゲリラ組織もそのことを十分に理解していたといえる。それは当時のゲリラ兵士たちの証言からも明らかになってきている。

とりわけ，「人民ゲリラ兵士団」の生き残り活動家たちがチワワ州を中心に結成した「メキシコ農民・労働者総連合（Unión General de Obreros y Campesinos de México）」は名称こそ労働組合的だが，その中核メンバーはゲバラ＝カストロ路線にしたがった農村ゲリラ戦争を小戦闘レヴェルで繰り返し政府軍や地主に対しておこなっていた。その元メンバーたちが異口同音に語るのが以下のような話である[12)]。

いったん武装蜂起をおこなってしまえば，それに続くのは反乱鎮圧との終わらぬ泥沼のような戦争状況の継続である。どんなに頭では分かっていても，そして変革すべき現実が焦眉の課題として要請していることを肌身に沁みて感じ取っていても，不毛な闘いを維持することをやめた途端に待っているのは死なのである。

政府軍の方は，米軍の支援を全面的に受けた「地域戦術演習 Ejercicios Tácticos Regionales」と呼称される非正規戦行動を「メキシコ農民・労働者総連合」に対抗してとっていた。この「演習」の規模を司令官の記録から引いてみると，動員兵員数 22,021 人，3,327 頭の家畜，731 台の軍用車輌，22 機の空軍機，9 両の有蓋貨車・客車。これに数には入れられていない「非正規」の「準軍事組織員」が加わるわけである。だが「グローバル・エクスチェンジ」,「農村運動政治経済研究センター」,「社会コミュニケーション全国センター」の 3 つの NGO の報告によれば，こうした公式発表はほとんど嘘であり，実際にはその数倍の特殊部隊兵士の動員がなされているという[13)]。

ということであれば，武装闘争組織側が戦闘を継続しなければならなくなるという言い分には残念ながら選択肢がなかったと言わざるをえない。それを考えると，武装闘争の存在の高らかな宣言は，何とも逆説的に農村部の，農民たちの疲弊を強めることとなった，といえる。この惨状は繰り返しになるが低強度紛争の先取り実質化であり，1980 年代前半に「武装闘争の第一波」が壊滅に追い込まれるまで 20 年弱にわたって持続したのであった。

都市ゲリラ闘争の状況

では，都市部での武装闘争はどうだったのか。

60 年代後半には 30 を超す武装闘争組織が展開したが，その組織形態は都市部では非合法性を活用するために「コンパートメント化形式」と彼らが呼んだ独立で行動する小集団の連携にもとづくものになっていた。そしてその組織形態には国境を越えたゲリラ運動のつながりが存在した。

1966 年 4 月から 8 月にかけて，メキシコ政府によってグァテマラのゲリラたちが，銃器不法所持と武装闘争への勧誘の容疑で逮捕された。翌年にはチェ・ゲバラの死に抗議して，「革命的左翼学生運動（Movimiento de Izquierda Revolucionaria Estudiantil）」の一細胞がメキシコ･シティの在メキシコ・ボリビア大使館に爆弾を仕掛けたことが発覚した。同時期，中華人民共和国で軍事訓練を受けた「メキシコ・プロレタリア革命党（Partido Revolucionario del Proletariado

Mexicano)」のゲリラたちはすでに活動に着手していた。この組織は71年に「アメリカ統一プロレタリア党（Partido Proletario Unido de América)」へと「発展的解消」を遂げるが，その時点で事実上壊滅状態に追い込まれていたことが分かっている[14)]。

同様に，「革命行動運動（Movimiento de Acción Revolucinaria)」は朝鮮民主主義人民共和国からの指令を受けて，地下軍事活動に取り掛かっている。これは，モスクワのパトリス・ルムンバ人民友好大学への韓国系メキシコ人留学生を介してその萌芽的組織が形成され，彼らの1966年のメキシコ帰国を機に一気に拡大した組織である。そのメンバーたちは平壌から40キロほど離れた軍事基地で訓練を受けたのだった[15)]。

これらを見てみると，メキシコ固有の問題に対応するため，現地の社会的条件を有効に活用した組織がないことに気が付く。その一方で世界革命を呼号しているわけでもなく，イデオロギー闘争がほとんど行われていないという，驚くべき事実にも突き当る。その点を含め，行動のラディカルさを「競う」ことはあったにしても，日本の場合のような党派間闘争はさほど見らなかったと言っても過言ではない（何よりもそれには地下活動という制限条件があった)。付け加えれば，ブラジルのカルロス・マリゲーラのグループのような独自性を保った組織もこの時点では形成されていない[16)]。

メキシコに政治犯はいないという公式発表どおり，メキシコ政府は1971年にいたるまで，これらの組織の存在を一貫して否定してきた。それが一定の都市ゲリラ闘争の活動条件をなしていたのだが，1971年5月に米国とメキシコの陸軍情報部間の情報交換と行動協定によって，先に挙げたほとんどの組織が摘発され，壊滅状態となった。とはいうもののこの時の防衛大臣の公式発表は以下のようなものだった。「この国にはゲリラは存在しない。そして何らかのゲリラ組織が現れるなら，われわれは直ちにそれを叩き潰さなければならない」。

ポスト《68年》初期の動向

しかしそれらの組織とは異なったレヴェルで，諸派の連合によって強力な武装闘争組織が結成される。「9月23日共産主義者同盟」（以下，「同盟」と略，図2）がそれである。8つの組織がハリスコ州の都市グアダラハラに集い，この名称の下に統一を決定したのが1973年4月のことだった[17)]。

そして彼らがメキシコ中西部に位置する「西部の真珠」と呼ばれる大都市グアダラハラで結成を宣言したのは，1973年3月15日――南米の左派が追い詰められ，中米では諸組織の競合が権力の横行を許している最中――のことであった。その日秘密裏に結集したのは，つぎの8つの組織からの代表者たちである。

①メキシコ共産党傘下に60年代前半に結成された共産青年団（Juventud Comunista）から分派した，メキシコ北東部ヌエボ・レオン自治大学細胞を核として，他の戦闘的な共産党諸分派を糾合していた「前進派 Los Procesos」。

②北部シナロアでシナロア学生連盟の学園主義を批判し，農民運動をはじめとした様々な街頭人民闘争にかかわることでラディカルな隊列を組織していた「疾病派 Los Enfermos」。

③1965年9月23日のマデラ兵営襲撃に衝撃をうけて結成されたのち1967年初頭にいったん公式に解党したものの，《68年》の弾圧への対抗することを合意点として山間部ゲリラ組織として再結集した，北部チワワの「9月23日運動 Movimiento 23 de Septiembre」。

④首都で叩き潰された学生運動の課題をラディカルに継承発展することを目的として，国立行政学院学生を軸に組織され，国営製鉄公社本部と御用組合「メキシコ労働者連合 CTM」住宅対策部事務局を「接収」（＝占拠）した行動で勇名をはせた「ラカンドン集団 Los Lacandones」。

⑤北部のメヒカリ，ティファナ，バハ・カリフォルニア3州の青年運動活動家たちからなる「農民派 Los Guajiros」。

⑥北東部モンテレイのローザ・ルクセンブルク主義活動家集団「戦槌派 Los Macías」。

⑦1968年に開催され「解放の神学」をみとめたメデジン公会議を受けて，カトリック教会の位階制を批判して「人民の司祭」を自称した神学生たちによる「専門学生運動 Movimiento Estudiantil Profesional:MEP」。

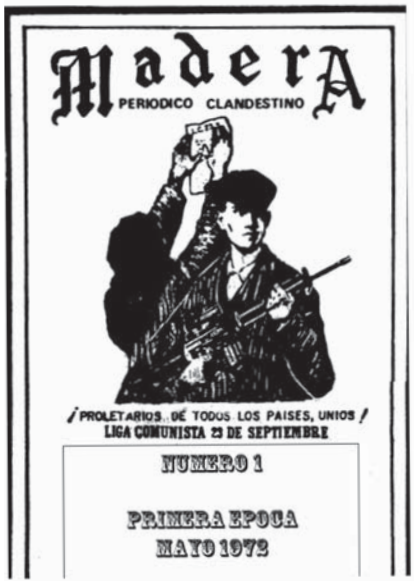

図2　9月23日共産主義者同盟機関紙『マデラ　地下機関紙』第1期創刊号（1972年5月）表紙。絵の下のスローガンには「万国のプロレタリアート，団結せよ！9月23日共産主義者同盟」とある。

⑧御用学生組織グアダラハラ学生連盟による学園暴力支配に対抗して，1972年に結成された「革命的学生戦線 Frente Estudiantil Revolucionario」（この組織は要人誘拐を戦術として認めるか否かの路線論争の結果，誘拐容認派の活動家たちが「人民武装革命軍 Fuerzas Revolucionarias Armadas de Pueblo: FRAP」として分派したのち，米国領事や大統領エチェベリアの義父を誘拐し，軍によって70年代半ばに殲滅されてしまう）。

「同盟」はまぎれもなく，1968年にメキシコ・シティで起こったメキシコ史のみならずラテンアメリカ史において最大規模の学生大衆運動を母胎としている[18]。同年7月末のデモをきっかけとし，見る見るうちに数十万人の規模へと自然発生的に成長したこの大衆的な学生運動に対しては，いずれの党派も指導的ヘゲモニーを握ることができなかった。欧米や日本の68～69年の運動とは異なり，根底においては素朴な民主主義を求めたこの大衆運動は，その総体としての社会民主主義的穏健さとは逆に，国家権力にとっての軍事的な打撃目標と（必然ではあるが）されていく。その結果が，68年10月2日の夜にメキシコ・シティの北部に位置する「三つの文化の広場」すなわちトラテロルコで起こった，軍による大虐殺であった[19]。この敗北を受けて地下活動・武装闘争へと路線を変更した諸党派のうちの，反スターリン主義（かつ非トロツキー主義）の組織が合体したのが「同盟」である。

「同盟」はその結成当初からゲリラ戦争をつうじた武装闘争－権力奪取を綱領次元において定

めていた。結成の翌年1月16日，北部シナロア州のクリアカン市で第二回大会を開いたこの組織は，すぐさま全国規模でのゲリラ部隊の組織化をめざし，メキシコ全土20の州それぞれに足場をつくるための「総決起」を決議する。

彼らの見通しは主観主義的な楽観主義にみちていた。作戦はつぎのような手順ですすめられることとなっていた。まず，数百人単位での「同盟」の活動家がクリアカンで「総決起」する。それに応じて数千人の学生が街頭に繰り出す。つづいて，約一万人の農業労働者がゼネストに突入する。それに影響を受けた各地の労学が次々と決起する…。

政府の対応はそれが実現されるのを抑えるために，現地の警察軍・「鷹兵団」・管区政府軍を総動員するというものだった。彼我の間に衝突が起こり，逮捕者多数，「同盟」側に4人の死者が出る結果となった。

「同盟」の総括はきわめて甘いものであり，この結果を「成功」と断じている。政府の反動を引き出したことがその理由である。だが政府側の対応が「総決起」当日にとどまるものではなかったのは言うまでもない。「同盟」が影響力をもっている各組織にスパイが潜入し，その大衆的基盤は次々と崩されていった。

結果，全国的なゲリラ戦争の参謀本部として調整をおこなうはずの司令部＝中央委員会は孤立し，各地の少人数の集団が「同盟」細胞として他との連携をまったく考えない冒険主義的行動に出ることをおしとどめられなくなったのである。そして結成から一年も経たぬうちに司令部は消滅し，一揆主義的な集団の「受け皿」としての「同盟」の名称のみが残ることとなった[20)]。

「同盟」とは異なる，ゲリラ戦争をめざした組織としては，「民族解放軍（Fuerzas de Liberación Nacional）」がある。この組織は，ジャーナリストのマリオ・メンデスに指導された「メキシコ反乱軍（Ejército Insurgente Mexicano）」を母胎とし，そこに北部ヌエボ・レオン大学の戦闘的学生活動家が合流する形で1969年8月6日に結成されたものである。これもまた，1968年の敗北に対する組織的総括の表現でもあった。

彼らは「同盟」のような楽観主義とはまったく異なり，長期にわたる反乱戦略にもとづく，ほぼ完全な非合法活動を主軸とした闘争展開をはかった。「民族解放軍」はメキシコ南東部チアパス州をはじめとした数州に地下ネットワークを形成していたが，1974年2月14日に家宅捜索を受けて多くの秘密資料が権力の手にわたってしまったことから，何人もの中心的活動家を殺害されてしまう。さらに，チアパスにおける支援ネットワークを暴かれ大打撃を被ったことで，極端な地下活動主義へと転換をしていく。

この際に，「民族解放軍」は「同盟」および都市ゲリラ組織「サパティスタ都市戦線（Frente Urbano Zapatista）」および「革命行動運動」に接近し，ゲリラ組織としての統一をはかるが失敗に終わっている。その原因としては，「民族解放軍」が他組織のとっていた要人襲撃や誘拐といった闘争方法をいっさい認めなかったこと，そのため他の組織との有機的統一や行動調整がまったく実現不可能なものとして「民族解放軍」に受け止められたことが挙げられよう。「民族解放軍」はチアパスでの組織再建に取り組み，その流れは後に「サパティスタ民族解放軍」へとつながっていく[21)]。

「破談」に終わった上記の統一提案直後の74年9月，「同盟」は十分なゲリラ戦力を獲得したという甘い見通しのもとで再度，北部モンテレイ市においてメキシコ有数の企業所有者であるエウヘニオ・ガルサ・サダを誘拐しようとして失敗し，この資本家を殺害する。翌月，グアダ

ラハラ市で産業資本家フェルナンド・アラングレンと英国領事ダンカン・ウィリアムズの誘拐に成功し，政府との「交渉」に要求した[22]。

しかし政府は「交渉」を拒絶し，その結果，アラングレンは「処刑」されることとなったのである。この事態に対する反動として，反乱鎮圧作戦は一挙に激烈さを増し，国家中央検事局（政治警察）のエージェントによる，「同盟」構成員・その家族・友人・知人に対する「対抗誘拐」「対抗殺害」が続けざまに起こることとなった。それらの作戦には，権力機関のみならず，これまで繰り返してきたように，準軍事組織の暗躍も大いに与かっていたことを銘記しておかなければならない。

こうした政府による圧倒的かつ陰湿きわまる組織的暴力は「同盟」の活動を徹底して弱体化させ，具体的な政治 - 軍事行動に打って出ることはほぼ不可能な組織状態に追い込んでいった。それにとどまらず，とめどない復讐のように国家権力はシンパの連続逮捕・長期拘留，さらには「失踪」作戦を継続する。

その結果，1975 年以降「同盟」は弱体化に歯止めがかけられず，80 年代初頭にはわずかな「細胞」が「同盟」を名乗って政治宣伝をおこなうというレヴェルにまで衰弱してしまう。さらに弾圧の矛先は「サパティスタ都市戦線」や「革命行動運動」などの 70 年代前半を生き延びた組織に対しても向けられた。それらの諸組織もまた「同盟」と同様に，組織的なレヴェルでの展開を見込めなくなるまで弱体化させられるが，その経緯は「同盟」の場合とまったく平行している。

おわりに

彼らのなかで精力的に攻撃に打って出たのは首都における「赤色旅団 Brigada Roja」（図 3）やオアハカ州各地で展開した「エミリアーノ・サパタ革命旅団 Brigada Revolucionaria Emiliano Zapata」などであった。

もっとも活動が派手だったのは「赤色旅団」だった。メキシコ石油公社総裁誘拐や各種の政府部局からの強奪，事務所占拠といった一連の作戦によって，1974 年にメキシコのマスメディアをもっとも騒がせた。だが，その作戦は基本的に突如指令が下り，はじめて顔を合わせるメンバーが指令にしたがった目標を攻撃するというもの以上でも以下でもなかった。種々の作戦が成功したのは，準備が十分になされていたからではなく，偶然の積み重なりがうまく働いた結果だと思われる[23]。

図 3　「赤色旅団」が街頭に貼ったポスター「われわれには君に伝えたいことがある」と最下部に書かれている。この句は組織化対象の人びとへの呼びかけと，ブルジョアジーに対する恫喝の両方の意味をもっている。

たしかに「成果」のみを見るならば，それらはウルグアイの都市ゲリラ・トゥパマロス[24]の水平的秘密組織の様態をウルトラなレヴェルで「超越」した「分子的革命行動」とでも呼ぶべきものだったかもしれない。だが彼らの「攻撃」は，政治的打撃をブルジョア権力に与えるための一貫性に欠

けていた（トゥパマロスの壊滅から得るべき教訓も持っていなかった）。さらにトゥパマロスがまがりなりにも有機的な政治的ゲリラ組織であったのに対して，「赤色旅団」はその有機性を欠いていたのである。そしてそのことが激烈な内部対立に直結することとなった。「赤色旅団」の「方針」はまさしく「諸問題」文書を基礎としたものであったが，そこから結果したのは「政治軍事局」派（政治課題重視）と「軍事委員会」派（軍事作戦重視）の路線対立であり，この対立＝分岐は79年には流血の相互のアジト襲撃――日本風に言えば「内ゲバ」――に堕してしまったのである。

一方，もっとも政治的・軍事的訓練がなされていたのは「エミリアーノ・サパタ革命旅団」であった。《68年》の敗北によって首都からチアパス州オコシンゴ市の郊外の「ダイアモンド」農場へと移動し同農場を「訓練基地」とした，この「旅団」の活動家たちは，「9月23日共産主義者同盟」の結成以前（72年暮れまで）に，すでに「旅団」の核となる組織化をなしとげていた。オアハカでの作戦行動は，「政治軍事局」からの指令の性急さを抑え込み，すべてがじっくりと練られたうえで政治煽動において成功するような「襲撃」として遂行された。

しかしながらその成功はオアハカでの組織化の進展につながらなかった。その理由は彼らの総括のなかでも明らかにされている。「よそ者」として風のように現れて作戦を展開し，秘密裡に風のように去っていく集団に，貧農やプロレタリアの誰が自らの命運を預けるというのか[25]。

また，「訓練基地」が置かれていたチアパス州の先住民族問題，さらにそれと直結した土地問題・農業問題が彼らの前に立ちはだかっていた。中央部で内部抗争が激化するころ，彼らは「9月23日共産主義者同盟」からの離脱を結論として出し，チアパスに同じく撤退していた「民族解放軍FLN」との合同をはたす。それは，「9月23日共産主義者同盟」的な政治に対する訣別であり，先住民農民運動への都市におけるラディカルな運動の主体的合流であった[26]。

こうしてもっとも活動的な「旅団」――中央管区と南部管区のそれら――を失った「9月23日共産主義者同盟」は，80年代に急速な凋落をみせていく。1981年1月に「政治軍事局」の2名が権力に殺害され，2月にもう1名が逮捕されたことを機に，「9月23日共産主義者同盟」は臨時全国指導部を急ぎ構成するが，活動の政治的基盤も財政的基盤も人的基盤も存在しなかった。この年6月に出された『マデラ』第58号が最後の機関紙発行となり，11月から翌82年2月にかけて臨時全国指導部の検挙が相次ぐと，この組織にはもはや何も残されていなかったのである（最終的な解党は1990年と言われている）。

この直後，ひそやかにメキシコ南東部のジャングルで「サパティスタ民族解放軍」が，FLNを一方の母胎に，先住諸民族のネットワークを他方の母胎に創設される。それはメキシコにおける社会闘争の質を――ネットワークとメディア革命を活用することで（図4）――根底から転換するものとなっていくのである[27]。

図4　チアパス州オベンティック村で，侵攻してきた政府軍をサパティスタ民族解放軍の支援の下で徒手空拳で追放しようとするマヤ系先住民のツォツィル人女性村民たち。

注

1）メキシコ革命については，以下を参照のこと。Knight, Alan, *The Mexican Revolution*, 2 volumes. Cambridge, U. K., Cambridge University Press, 1986. サパタとメキシコ革命については，ジョン・ウォーマック Jr.，向後英一訳『サパタとメキシコ革命』，早川書房，1970 年。

2）Meza Velarde, Adriana, y Rubio Zaldívar, Andrés, "Luchas socials en el estado de Guerrero: los movimientos radicales", mimeógrafo (1982-1986), guardado en el Archivo del Centro de Investigaciones Históricas de los Movimientos Armados (ya desaparecido).

3）以下を見よ。Castellanos, Laura, "introducción" de *México armado 1943-1981*, México, D. F., Ediciones Era, 2007.

4）市田良彦「序論」，市田『闘争の思考』，平凡社，1993 年。

5）上記 7 条件は，以下をもとにまとめた。Castillo García, Gustavo, "El gobierno creó en 1976 brigada especial para 'aplastar' a guerrilleros en el Valle de México", *La Jornada*, 7 de Julio de 2008.; Aguayo Quesada, Sergio, *La Charola: Una historia de los servicios de inteligencia en México*, México, D. F., Grijalbo, 2001.; Torres, Jorge, *Nazar Haro: La historia secreta*, México, D. F., Debate, 2008.

6）この概要は，Luis Sierra, Jorge, "Fuerzas armadas y contrainsurgencia (1965-1982)", en Oikión Solano, Verónica, y García Ugarte, Marta Eugenia (eds.), *Movimientos armadas en México, siglo XX*, volumen II, El Colegio de Michoacán y CIESAS, 2006. pp.361-404 の主に冒頭部分を参照した。

7）Rangel Lozano, Claudia E. G., y Sánchez Serrano, Evangelina, "La Guerra sucia en los setenta y las guerrillas de Genaro Vázquez y Lucio Cabañas en Guerrero," en Oikión Solano, et al. (eds.), *Ibid.*, pp.495-526.

8）Ramírez Salas, Mario, "La relación de la Liga Comunista 23 de Septiembre y el Partido de los Pobres en el estado de Guerrero en la década de los setenta", en *Ibid.*, p. 530.

9）Orozco Orozco, Victor, "La guerrilla chihuahuense de los años sesenta", en *Ibid.*, pp.337-360. および Henson, Elizabeth, "Madera 1965: Primeros Vientos", in Herrera Calderón, Fernando, y Cedillo, Adela (eds.), *Challenging Authoritarianism in Mexico: Revolutionary Struggles and the Dirty War, 1964-1982*, New York & London, Routledge, 2012, pp. 19-39.

10）Orozco Orozco, *Op. cit*, p. 352.

11）Spenser, Daniela (ed.), *Espejos de la Guerra fría: México, América Central y Caribe*, México, D.F., CIESAS/Porrúa, 2004, p.18 より重引。

12）Alonso Padilla, Arturo Luis, "Revisión teórica sobre la historiografía de la guerrilla Mexicana (1965-1978)", en Oikión Solano, Verónica, y García Ugarte, Marta Eugenia (eds.), *Movimientos* …, pp.112-114.

13）拙稿「グローバリゼーション，エコロジー資本主義，先住民族」，『日本寄せ場学会年報　寄せ場』第 20 号，2007 年，115-137 ページ。

14）Luis Sierra, *Op. cit.*, pp.384-385.

15）Oikión Solano, Verónica, "El movimiento de acción revolucionaria: Una historia de radicalización política" en Oikión Solano y García Ugarte (eds), *Op. cit.*, pp.417-460.

16）Marighella, Carlos, *Minimanual do Guerrilheiro Urbano*, Material mimeografado datado de 1970. (escrito em Junho de 1969.) 英文からの重訳（日本・キューバ文化交流研究所編訳版）が三一新書にあるが，正確を期すため原典を参照した。

17）以下を参照せよ。Luis Sierra, *Op. cit.*, p.386ff,; Robinet, Romain, "A Revolutionary Group Fighting Against a Revolutionary State: The September 23rd Communist League Against the PRI-State (1973-1975)", in Herrera Calderón & Cedillo (eds.), *Op. cit.*, pp.129-147.

18）拙稿「メキシコの一九六八年，あるいは『マイノリティへの生成変化』が残した問い」，小泉・鈴木・

檜垣編著『ドゥルーズ／ガタリの現在』，平凡社，2008年，301-324ページ。

19）エレナ・ポニアトウスカ，北條ゆかり訳『トラテロルコの夜』，藤原書店，2005年。

20）Reyes Peláez, Juan Fernando, “El largo brazo del estado: La estrategia contrainsut\rgentendel gobierno mexicano”, en Oikión Solano y García Ugarte (eds), *Op. cit.*, pp.405-413.

21）Cedillo, Adela, *El fuego y el silencio: Historia de las Fuerzas de Liberación Nacional*, México, D. F., Edición del Comité 68 Pro Libertades Democráticas, 2008.

22）Flores, Óscar, “Del movimiento universitario a la guerrilla: El caso de Monterrey (1968-1973)”, en Oikión Solano y García Ugarte (eds.), *Op. cit.*, pp.485-486.

23）拙稿「ウルグアイ現代史粗描:『トゥパマロス』による解放闘争を視軸に」,『情況』第3期第11巻2号，2010年，82-94ページ。

24）Aguayo Quesada, Sergio, *Op. cit.*, pp.93ff.

25）Ramírez Salas, *Op. cit.*, pp.545ff.

26）Véase Cedillo, *El fuegp y el silencio.*

27）Leyva Solano, Xochitl, “El neozapatismo: De guerrilla a “Social Movement Web””, en Oikión Solano y García Ugarte (eds), *Op. cit.*, pp.725-738.; 拙著『サバルタンと歴史』，2001年，青土社，を参照。なお，現状については，拙稿「低迷する社会闘争，飛躍を狙う国家連合――ラテンアメリカの現状から」,『ピープルズ・プラン』第57号（2012年3月），76-85ページを見よ。